



TITLE:

バースンスの「景氣豫測」

AUTHOR(S):

桑原, 晋

---

CITATION:

桑原, 晋. バースンスの「景氣豫測」. 經濟論叢 1931, 33(3): 445-455

ISSUE DATE:

1931-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130073>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號 三 第

卷三十三第

行發日一月九年六和昭

## 論 叢

家屋税の果進 . . . . . 法學博士 神戸 正雄  
長期波動について . . . . . 文學博士 高田 保馬

## 時 論

恩給の改革 . . . . . 法學博士 神戸 正雄

## 研 究

米穀を通じて見たる朝鮮と内地との關係 . . . . . 經濟學士 八木芳之助  
一般的均衡體系と交換方程式 . . . . . 經濟學士 柴田 敬  
信用擴張と銀行流動性 . . . . . 經濟學士 中谷 實  
農家における米の販賣 . . . . . 經濟學士 谷口 吉彦

## 說 苑

近江商人と地方金融 . . . . . 經濟學士 菅野和太郎  
パースンスの『景氣豫測』 . . . . . 經濟學士 桑原 晋  
最近の獨逸財政 . . . . . 經濟學士 大谷 政敬  
植民地鐵道政策の意義について . . . . . 經濟學士 金持 一郎

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

## パースンスの「景氣豫測」

桑 原 晋

### 一、はしがき

景氣研究の一つの大きな實際的な興味は、景氣が將來的關心事であること、即ち如何にして將來の景氣を豫見しうるかの問題に在る。勿論齊しく豫測と言つても、パースンス乃至はアメリカその他資本主義各國の景氣研究が専ら景氣循環の豫測に力めるのと、モスカウ研究所の如く經濟發展の根本方向を豫見するものとの間には著しい相違があるにしても。

經濟的豫測方法は、本來アメリカに於て始まり、アメリカに於て高度の完成へ齎され、經濟學の重要な部門ともなつた<sup>1)</sup>。しかるにミツチエル自ら公言するがごとく、大部分のアメリカの景氣豫測者は景氣變動に關する理論化より遠ざかつてゐる。しかし此の態度が賢明であるか疑はしい<sup>2)</sup>。わたくしはそれらの疑問を解決

1) Wagemann, Economic Rhythm, V.  
2) Mitchell's Prefatory Note in op. cit.

する手がかりとして、パースンスの見解を知ることに一應の興味を感じる。<sup>3)</sup>

## 二、本書の構成

本書は三部に分たれ、第一部に於て「景氣變動豫測の問題」を取扱ひ、第二部に於ては「一八七五年より一九三〇年に至るアメリカの景氣の統計的・年代的記録」を示し、第三部に於ては「該資料の分析」を試みてゐる。

説明は、第一部(第一章より五章まで)は一九三〇年一〇——十一月現在に於ける景氣状態の分析と將來の豫測(該現在に於てなされた)とを以て始まる。

(註一) 右諸章は一九三一年一月一日と十二月三日の間に書かれ、十一月一〇日及二十四日・十二月八日及二二日の Barron's National Financial Weekly と、一九三一年一月二日の New York Evening Post's Annual Survey of Business and Finance とに論文として發表されたものを、そのまゝ本書(一章—五章)に轉載されたものである。之等の論文は勿論當時利用し得た資料より得られた歸納と演繹との敘述である。そこに記された「蓋然的な將來の展開」と云ふ概念

は論文の書かれた日附からの「將來」であつて hindsight の要素を何等含んでゐない。(緒論参照)

本書の説明方法は、特殊的なるものより一般的なるものへの道をとる。かくて第一部は特殊の豫測を呈示し、それに必要な一般的諸問題に觸れる。第二部は任意の景氣相(又は段階)の間における豫測を形づくるに必要な資料を呈示し、第三部は景氣變動豫測に於て生ずるところの經濟的蓋然分析の一般諸問題を討議する。

第二部は、アメリカ合衆國における景氣の蓋然的循環運動の概念を構成するに本質的なりと彼が考へるところの重要な經濟的・政治的・その他の諸々の出來事及び展開の月々の・年々の統計圖及表と歴史的記録とを呈示する。之等の資料は不景氣の期間並に回復・繁榮及後退時期間の豫測に對する基礎を形づくる。

第三部に於ては、經濟的分析蓋然分析の諸問題が討議されてゐる。説明廣汎に亘り、景氣變動の經濟的分析は經濟學の一般的理論の畑と同一の分野を蓋ふ。且

蓋然分析は應用論理學の數多の問題に亘る。ために「研究分野は餘りにも廣く、主題は餘りにも新らしく、従つて未解決の問題は餘りにも多い」<sup>4)</sup>。第三部に於て與へられた企ては、(a)景氣豫測の問題に經濟分析蓋然分析を應用せむとする方法の解明。(b)景氣變動理論の分類である。(c)經濟理論に統計的資料及方法を應用することの吟味である。「豫測といふ惚々しいこの問題にはなさるべき多くの問題が残されてゐる。しかし……景氣變動豫測問題の解決は、もしそこに解決がありとすれば、經濟理論及論理の根本を適當なる統計的・歴史的記錄に應用するところに見出さるべきである」<sup>5)</sup>。

### 三、豫測の概念及原理

出發點は現在であり、目的地は將來である、乗物は分類され分析され測定されたる過去の經驗である。<sup>6)</sup>景氣の豫測は、將來の(選定された期間の)蓋然的循環展開に關する概念の記述である。統計的・歴史的・經濟的經驗に一致するならば realistic となり、新資料及時下經

驗に照應して變更するならば elastic となり、重要な豫言しがたき出來事が起り・展開が起り・或は景氣感情が急速に變化するならば、その變化に支配される。それは probability の敘述であつて、certainty の敘述ではない。<sup>7)</sup>

産業的生産及取引の指數によりて表はされたる景氣循環は常に直接に顯著な出來事又は展開に關係する。そして指數は、(a)内部的經濟諸力、(b)外部の出來事及展開の作用に反映するところの景氣の實際の動搖の繪を與へる。その歴史的地盤から離れては、指數は如何なる期間に對して意味するところ少く、經濟理論から離れては、指數によりてあとづけられる循環は、讀者が弄ぶ機械的 chart に對する單なる經驗的曲線となり終る。しかし (a)その歴史的地盤に結付け・光に照らして説明し、(b)經濟的分析によりて合理化されるところの、指數の動搖は、意義に滿ちたるものとなる。かく用ゐられるならば、指數は直ちに景氣經驗の生ける記錄となり、景氣における「將來の蓋然的展開の彈力的

4) P. 3.  
5) P. 4.  
6) P. 41. 284.  
7) P. 283.

現實的概念」を形づくる基礎となる。この概念こそは彼が「景氣豫測」なる言葉を用ふる時意味するところのものである。<sup>8)</sup>

また、景氣變動豫見の問題の解決は、もしそこに解決があるとして、適當なる統計的記錄及歴史的記錄に經濟理論及統計的分析を論理的に應用するところに見出さるべきである、といふのが本書を貫ける彼の信念であり希望である。<sup>9)</sup>

「ひとたび大規模の資本家的生産制度をとつて以來景氣の無障碍擴大といふものは無かつた。戦争・收穫及人口・疫病・自然現象・經濟組織の變化・金生産等々あまたの外部の出來事は不斷の展開を沮む。けれどもそこには我々の經濟制度より湧出づるところの、規則的な景氣の波動の內生的諸原因がある」とのシュピート<sup>10)</sup>ホフの見解に従つて、景氣の行動を記錄し能ふだけ長期間（一八七五年より一九三〇年までの五五ヶ年）の産業的生産及取引の月々の指數を構成し、利率・證券價格・商品價格の月々の系列及び收穫物・鑛物・製造物の生産の

年々の系列を附隨的に蒐集す。（第二部参照）。

#### 四、具體的豫測（豫測法。一九三一年における景氣回復の時期。回復の道ゆき）。

一九三〇年十一月現在を以て鋭き不況の谷に在りて見、（註二）右現在の不景氣と極めて似たる例として一八八四—八五、一九〇七—〇八、一九二〇—二一年の三期間を發見し、その中特に一八八四—八五年の不景氣と一九三〇年の不景氣とが著しく類似してゐることを見極め、この類推を應用することによりて、景氣が早晩上向くだらうといふことは避けられぬ。そして、恐らく一九三一年の二月か三月より上向くだらう、しかし「正常」景氣は一九三一年の終りまでは又恐らくは一九三二年の第一四半期（三月頃）までは期待されぬだらうと云ふのが豫測の概觀である。

（註二）パースンスは、一九三〇年一〇月・十一月のアメリカの不景氣は <sup>(註三)</sup>major depression の谷に在ると見る。何故こう考へるか。一八七五年來過去七不景氣（一八七八—七

8) p. 40.

9) p. 3, 283.

10) (Spiethoff, "Krisen" in Handwörterbuch der Staatswissenschaften, S. 82.)

九。一八八四—八五。一八九三—九四。一八九六—九七。一九〇七—〇八。一九一四—一五。一九二〇—二一)の記録は、當時推測された正常的生産及取引指數の七四パーセント乃至八二パーセントの間の谷を示す、しかるに一九三〇年一〇月の指數は七三で、一月は何等の變化なしとの調査に基く。(それにしても、しからば何故に景氣の水準は實質的に例へば七〇より低下しないかの問題が残る。この理由につきては前出 Barrois 十一月一〇・二四日参照)

(註三) 景氣は繁榮期より不景氣へと動搖し、更に繁榮期に歸るとしても、この「循環的動搖の長さ(時の)——強さは姑らく措き——に實質的の相違を認め、minor depression(一九二七。一九二四。一九一九。一九一一。一九〇四。一九〇〇。一八九一。一八八八)とハッキリ區別する。しからば一九三〇年一月に於て一九三一年の景氣の道ゆきの時間表を如何にしてとらへるか。今彼の算出方法を略記する。若し我々が一九三〇年七月(指數八〇)の不景氣の谷の始まりから算へて七ヶ月(一九二一・一九〇八・一八八四年の三不景氣期間の極大の長さ)を一九三〇—三一の間に許すならば、我々は不景氣の谷の終の月として一九三一年一月を得る。しかし乍ら、もし我々が現下の不況の谷の始めを一九三一年九月から算へるならば、谷の終りの月として一九三二年の三月を得る。

(註四) 不景氣の谷は五ヶ月から七ヶ月間つゞいたら、

パースンスの「景氣豫測」

次にはしつこい回復が始まることを過去の經驗(註二)から發見しての推論である。

一九三〇—三一年の谷の始めの日附を兩者何れを選ぶかは、前記の major depression の類推によりて支持せられうる。しかし乍ら九月を選ぶ理由は七月をえらぶ理由よりも有力である。(註五)

(註五) アメリカに於て曾て記録されたるうちで最も惡き早魃のアクシデント——グアジニアよりモンタナ、ペンシルヴァニアよりラキマスへの三〇州へわたる——は七月から八月へ起り、その効果は九月及十月に濟んだから。

だからして、歴史的先例に基き、最近の資料を土臺とすれば、最もたしからしい景氣の上向く時日は一九三一年の二月乃至四月である、と結論しうる。もし他の面倒な豫言しがたき展開(曾て見ざる廣汎なストライキのごとき)が生ずるならば、産業的生産及取引の指數は實質的に低下し、回復はのびるかもしれぬ。またその反對に、例へば南半球における國際信用狀態の決濟又は小麥の不作などが起れば、景氣の回復は速まるであらう<sup>11)</sup>。

もし期待さるゝ景氣の上向が時間表の通り——一九三一年二月乃至四月より遅からず——事實來るならば、その後の展開の道ゆき如何。彼は再び一九二一・一九〇八・一八八四年の先例に照らして、回復はその何れの場合にも産業的生產指數が實質的にノルマル以上<sup>(註六)</sup>に達するまで、月から月へ僅かに輕微な・稀なる阻害を以て進み、「ノルマルへの回復の間隔」(この三先例における)は各一四・二四・一二ヶ月であり、その期間或る月より翌月への指數の動搖は次表の如きことを知り、即ちノルマルへの回復の期間は一二ヶ月乃至一四ヶ月であり、而も回復の期間、指數の月々の動搖は二ポイントの下落と四ポイントの上騰との間に亘ることを知る。

ノルマルへの回復期間指數の動き

の 回 復	期 間	月 間 回 復	
		期 間	月 間
一九二一年九月— 一九二二年十一月	14ヶ月	1	-2
一九二一年九月— 一九二二年十一月	14ヶ月	1	-1
一九二一年九月— 一九二二年十一月	14ヶ月	3	0
一九二一年九月— 一九二二年十一月	14ヶ月	3	+1
一九二一年九月— 一九二二年十一月	14ヶ月	3	+2
一九二一年九月— 一九二二年十一月	14ヶ月	4	+3
一九二一年九月— 一九二二年十一月	14ヶ月	4	+4

合 計	40ヶ月	一八八五年六月— 一八八六年六月	
		12ヶ月	12ヶ月
4	{	2	1
		2	
36	{	8	3
		7	
		13	7
		7	
		1	1

右の表に要約された經驗を基として、もし景氣が一度發足するやチャンスは36より4で、次に來る月の産業生產及取引の指數はその月の指數と等しいか又は大きくなるだらうことを云ひうる。尙又、もし景氣が二月から四月へかけて回復し出すならば、ノルマルへの回復は一二ヶ月乃至一四ヶ月後れて、即ち一九三二年の二月乃至四月に完成される、ことを云ひうる。但しそれは經驗に基く maximum の日附であることを注意する必要がある。 minimum の日附は一九三〇年二月における回復の起點、ノルマルへの回復の期間は一二ヶ月、ノルマル景氣の到達は一九三一年一月である。<sup>12)</sup>

一九三一年—三二年におけるこの景氣展開の時間表の資料より作製されたる時間表は次のごとし。

12) pp. 44-5.



一九三一—三二年における景氣の蓋然的展開表

景氣の蓋然的展開		より早からず	より遅からず
不景氣の谷が終る……その後回復ついで起り重要な障害なしに月から月へつゞくノルマル景氣到達せらる……	一九三〇年十一月—一九三一年三月		
	一九三一年十一月—一九三二年六月		

右の景氣展開の時間表——曰く、景氣回復の始めは一九三一年の早春、ノルマル景氣の到達は一九三一年の歳末又は一九三二年の第一四半期——を受入れることは、何も我々の概念が正に止まらねばならぬといふことを意味しない。却てたえず最も近き經濟的展開と一致せしめて修正すべきである。更に我々の豫測は、もし都合よき又はよからざるアクシデントが起るならば變更すべきである。……しかし我々のもとの豫測はそれによつて誤りとなるのではない。經濟學者の豫測は、醫者の豫斷のごとく、診斷にもとづく。醫者の診斷及豫斷は、もし患者が新なる生命力を獲得するか又

パースソスの「景氣豫測」

は電光に打たれて死ぬるならば、誤りとは判斷されない、經濟學者の豫測も同様である。<sup>13)</sup>

(註六) 彼の「正常」概念について一言する必要がある。

彼は言ふ。景氣の動搖に於て測定さるべき變化は一般景氣である。一般景氣を反映するところの統計系列を選んだら、我々は、何ものか——平均又は長期的趨勢の線又は「ノルマル」——を、與へられたる線として選ばねばならぬ。與へられた線(それによりて測定するところの)の選擇は、よし我々がその與へられたる線を「ノルマル」と呼んだところで、景氣は特別の擾亂原因なくば一定に止まると考ふことを勿論いみしない。景氣は變化するものであり、たえず流れる——大きい偏倚を結果する力は自己調節的であるかもしれぬけれども——、それで變化(繁榮より不景氣へ)のときを問題にするためには、我々は目盛と與へられた線とを要する。「ノルマル」の概念は「變化」と對立するものではない。(この點ミツチエルが正常概念は變化と對立するものであるとするのと異なる。Introduction to Business Annals, p. 32) 「ノルマル」は、我々がそれによりて變化の「プラス及びマイナスの外れ」を測定するところの與へられた線である。<sup>14)</sup> 右の「豫見が誤りとなつてあらはるゝかもしれない、がしかしそれでいい」「私の先見は、屹度、記述された

13) p. 46.

14) pp. 211—2.

道ゆきを辿るだらうと云ふ豫言として判斷さるべきでなく、財界は恐らく、こう展開するだらうとの豫見として判斷さるべきである<sup>15)</sup>。先見は當時利用した資料の分析及評價に基くが、この『分析及評價の誤謬——もしありとすれば——は實際的誤謬であり、豫見者側に勘定さるべきである』しかし乍ら、豫言しえられざる出來事の發生又は豫言しえられざる展開の擡頭の故に來る先見の失敗は實際の「失敗」ではなく、即ち先見者側の誤謬として計算すべきではない。『先見は、實際的には、財界を刺戟し又は不振ならしむるやうな重要な「豫言し得られざる」出來事は何等起らないだらう、との假定の上に形づくられてゐる。<sup>16)</sup>』

再び例をとれば、『この點に於て、それ（景氣進行の時間表）は、蒸氣船の航行及到着の時間表の如きものである。外國の港へ到着する定刻は見當立てられた目標ではあるが、常に當るわけではない。「ノルマル」な速度があり、「ノルマル」な航路があるが、艤装へのアクシデント又は天氣の移り變りは、一時間・一日・一週

間だけ船を遅らせるかもしれない。航海中、船員達は、船の現在の地位及び速度に照らして、到着時間の豫測を修正する。しかし時間表は、棄却されない。依然として有用である。同様にして、一九三一年の景氣展開の現實的概念も有用である<sup>17)</sup>。

## 五、つけたり（批判と問題）

資本主義的生産を採るならば景氣の變動は必然的に内生的に繰返へす、といふ立場をとれば、そして意識的無意識的に各國特殊の經濟組織を孤立的に（勿論利用する現下の資料——産業的生産及取引指數——自體が世界的影響の下に立てるものであつてみれば多少の逃れ路はあるにしても、又アメリカが世界の景氣をリードしうるとの自恃を有するにしても、問題は依然として残る）考へて、そこに生ずる景氣循環豫測をすることには一應の意味が考へられる。しかし右の立場をとるにしても、そして過去の歴史的經驗の相似<sup>パレル</sup>（一九二〇—二一・一九〇七—八・一八八四—五）、特に一八八四—八五と一九三〇—三一年との

15) I. p. 47.  
16) p. 47.  
17) p.

歴史的比較法を採るにしても、果して一九三〇年がそれらと同じ道ゆきをとるだらうといふことには疑ひなきを得ない。殊に此のたびの世界的不況は、従つてアメリカの不景氣は世界大戰といふ未曾有の出來事、延てはそれに基因する本質的に異れる幾多の出來事が蟠つて居り、本質的に従前の不景氣と異なる内容と形態をとつてゐるとすれば、その間、質の差違をニグレクトして一概に過去の經驗を當てはめうるかが問題であり(質の差違をニグレクトして數字に現はれたるものだけを取扱ふもので計量經濟學の本質があつたにたとへて、その際にはその學自體の本質が問題となる)、資本主義的生産關係の異なる段階をいきなり比較することの當否が問題となりはしないか。勿論、恐慌(不景氣にしても)である限りに於ては常に何等かの相似點共通點をもつであらう。而も基礎的な相似性をもつと共にまた特異性をもつ。沉んや選ばれたる相似性が基礎的なものにあらずして、極めて外見的のものであるに於てをやである。

よしんば齊しく戦後の一九二〇—二一の沈衰と一九三〇年のそれとを相似と見る見方にしても、獨乙景氣研究所が現實に否定の裏書きをしてくれる。(尤も個々の點につきては異論の餘地あるが)。(註七)

(註七) 一九二〇・二一年アメリカ恐慌の回復の起點となつたものは新しい購買力の増大、市場の擴大に基くものではなくして、新興産業部門、新技術等々の舊いそれを犠牲とする發展である。しかし現在の世界恐慌には最早やかくの如き前提さへも存在しない。新興産業部門はいづれも異常な過剰生産に沈衰し、購買力も甚だしい萎縮をつけてゐる。それ故先行する恐慌の周期をもつてこの世界恐慌の回復を卜せんとするのは根本において誤つてゐると」(ベルリン景氣研究所四半期報、一九三〇、第五卷第三冊。經濟往來第六卷第七號阿部氏論文參照)

また世界交通經濟の現段階においてかかる各國各様の孤立的な豫測がどれほどまでの合理性をもちうるかについても一般的な問題が介在する。假りにパースンスの豫測が、それらの點につきては問題存せず、アメリカに於ては妥當であるとしても、孤立化されたる單なるアメリカだけの景氣の回復と世界のそれとの間の

關係を何う見るか。再びふりかへりて、我を生かさば他を活かさざるべからざる現時の世界經濟のからくりを知る。『世界不景氣と一緒でなかつた Major

depressin (アメリカに於ける) は只々一八九六年のそれだけ(アメリカの金本位制の脅威に根ざせる不景氣)であつた<sup>18)</sup>』とパースンスも明言してゐながら、事實上はアメリカの不景氣と世界の不景氣とを暗に引きはなされたものと考へてゐないだらうか。しかし世界不景氣の中のアメリカ不景氣であつて、アメリカの不景氣獨自の原因及景氣回復の獨特の道ゆきを餘りに重くみることは當を得まい。

要するにパースンスの豫測の由て來る地盤なり根柢なりに彼の豫測を導く理論の薄弱さを見る。あまりに歴史的比較と統計數字とに走りすぎ頼りすぎた傾きはないだらうか。あまりに經濟界を機械的に見てゐないだらうか。勿論「經濟界は機械體にあらずること」を明言はしてゐる。しかし乍ら、前の汽船の例證に於て、汽船の速度及航路に景氣のそれらをなぞらへたあ

たり(比喩そのものが妥當を缺くのであるかもしれぬとしても)、事實上は大なり小なりの機械觀が離れてゐない、ことを示す一例である。

勿論彼は經濟理論の重要性を十分強調してゐる、(前出)、けれども主として據るところは統計と歴史的經驗とである。「今日の經濟學者は大部分經濟學に用ゐらるべき適當なる理論的方法に關する獨斷的概括に興味をもたぬ。彼等は經濟學の發展における質的分析對量的分析に關する討論をしない。何となれば具體的經濟問題或は一般的經濟理論へ量的分析を適用することの正當性を疑はないから<sup>19)</sup>』といふミツチエルの言葉を以て裏書としてゐる。事實我等は統計的論證に用ゐらるゝ概念及假定・統計的歸納の有利性及限界・及び統計的分析の可能的多産性に興味を有つ。けれどもまた經濟學への統計の寄與(第一に富の生産・ストック・交換・分配・消費に關する利用されうる量的資料の範圍・性質・連續に、第二に經濟學が取扱ふところの特殊の數的資料―時系列のごとき―及び特殊の問題―一群の要素の各々の影響の測定

18) p. 19.

19) (Mitchell, "Quantitative Analysis in Economic Theory", American Economic Review, March, 1925.)

ごとき―取扱にとりて適當なる統計的方法の發展に依存する<sup>20)</sup>は寄與として、經濟理論はまた別個の獨自の存在をもつ。經濟學理論における統計の役割を重要視しつつも、世界經濟の現實の動きを觀察し、國民經濟の現段階を把握するためには、鋭き理論家でなくてはならぬ。我々のこの研究態度にあまりにパースンスの本書は遠い。

「我々の住む財界は機械體ではなくて、多様・複雑・相互作用・反響・及人間の慾望恐怖希望のムラ氣の世界である。まゝ、事實及論理が人間の感情に従屬することのある世界である。獨りでは合理的なる個々人も、他の合理的な個々人と結合して、却つて不合理な mob を形づくる。主たる徴候として希望・向ふ見ず・怠惰を伴へる樂觀主義の流行病に悩まされ、或は主たる狀態として恐怖・臆病・怠慢を伴へる悲觀主義の流行病に悩まされる。戦争・旱魃・洪水・地震・貨幣變革の世界である。かかる世界に在りては景氣變動豫測の “sure-fire” system もなければ、信賴すべき “trick” method もあり得ない<sup>21)</sup>」。果してしからは景氣循環の豫測は單なる

臆測に終るべきものであらうか。もし科學的豫測が存立しうるならばその認識論的基礎及限界如何。その實用性如何。それとも經濟生活の根本方向に豫測は限らるべきものかどうか。

――六・七・八――

20) p. 243.

21) Persons, Forecasting. pp. 3-4.